

天明二壬寅歲旦

筑紫風羅堂講中

三ツ物

米山下

尚門の徒矣ハ

鬼神ともやうなる
蝶ふくんと

おろふ歌ももや笑ひそめ

至節節

素角

定々お日の今月風を

坐來

是もふ波相生けし風吹て

菊之

春真

陽そや物むむしり後望り

一刀舎

北流

梅も香や排能の火を消ふ

冠耳

此代の侍も身れや影うり

風左

とのせ月に後立さる余をふ

百兒

糸よも更すもくちく牙也くね

馬川

婿も手に中を揺り音る

卷之

むんくとも舟の面も次後ふ

虚遊

車つりや海つるもくちく

菊之

若すんハこうそ 花うね

木兆牛

字く死まや東海道を巻てけ

凡裡觀
坐來

セノ
菜尾

子何うこれおのこは甲記哉
こゝせぬまは元風のはやま
はるもかほにますれ
とあり〜電〜

かゝる時風の落もや舞も

風裡主

陪者も行ふ事てまう木橋

至節主

文通

ぬく先もやそあられう
嶺雲老人

追加

心も奥や押戻さうり
鳥雲舎
文推

